



長城を行く 第四回

慕田峪



市街地から約60キロ、遊覧バスで2時間の距離にある慕田峪は、北京では数少ない原始の雰囲気を残す長城だ。八達嶺の混雑を緩和するため1985年に部分修復を完了し、観光地として一般客に開放された。

中国北方の春は唐突にやってくる。北京市街から長城にむかう国道の並木は、未だ芽吹きをむかえていない。見上げるような大樹に緑の一片もなく、樹間に北国の殺伐とした風景を見とおすことができる。それが慕田峪にのぼり、見張り台の敵楼から山肌を見下ろすと、縹渺とした霞の中に薄紅色の春が萌えているではないか。金山嶺長城で冬枯れの荒野を走破したのはほんの数日前だったのに、季節のうつろいはなんと劇的というほかない。

いま、慕田峪の山野を彩っているの

は杏花だろうか。近寄って観察してみると、花卉からほのかに芳香が漂ってくるが、遠目には山野に春雪が降り積もったよう、その息をのむ美しさにしばし陶然とする。

中国人は杏が好きだ。その飾り気のない花は、報春花（春を告げる花）とよばれ幾多の古書に登場する。北京人が好む乾果の代表格は杏で、ジャムや砂糖漬けも広く親しまれている。デザート逸品として有名な杏仁豆腐を作るには、種子の胚乳が欠かせない。熟れた果実は、初夏になると安価な果

物として庶民に好まれる。

慕田峪の関口には、三つの楼が横に連なっている。真ん中の楼は空心で内部には往時兵隊が起居し、壁には敵の襲来を見張り、矢を射るための箭窓が穿たれている。二つの側楼は実心で、その内部に空間はない。

長城はこの三連楼を登り口として、東南方向の大角楼山と西北の牛犄角辺にむかつて急峻な斜面を巨龍のように這い上がっていく。最高高度は海拔1004メートルで、本格的な山岳地帯である。勾配のきつい東南の城壁にとりつき、幾つかの敵楼をこえると立ち入り禁止の立て札が現れ、にわかには悪路となる。修復がまだなのだ。

慕田峪は金山嶺から一気に数十キロも南下したところがあり、ここを境に長城は再び北行し、河北省の独石口で万里の長城の北端に到る。北にむかう巨龍は慕田峪の数キロ先で枝分かれしてもう一匹の小龍を放ち、それは居庸関、八達嶺へとつらなる。これまで見てきた黄崖関、司馬台、金山嶺、そしてここ慕田峪など農耕地帯の外縁をのたうつつ巨龍を外長城と称し、居庸関、八達嶺など内向する小龍を内長城とよぶ。外長城を突破して京師（首都）に

迫る夷狄の軍隊から王都を護る役割を担ったのが内長城だった。

慕田峪の北斜面には北方異民族の侵入を阻む防衛上の必要から、断崖絶壁に長城が築かれた。長大な城壁を支えるために2本の鋼鉄が資材として使われた、と史書にある。長城建築史上空前絶後の壮筆を一目見ようと鉄材の所在を求めて歩きまわったが、それを探しあてることはできなかった。

そろそろ下山しなければならぬ。最後に敵楼にのぼって、遙か南の慕田峪村を俯瞰する。杏の花のむこうに田畑が望まれ、小さな人影がかすかに動いている。杏は農耕をつかさどる農暦との関係も深く、歳時記の春の項には「杏の花は茶（苦菜）の如し、白沙を耕すべし」とか、「杏花盛んなれば、沙白、軽土の田を耕すべし」などの格言が散見される。白沙とはこの場合、農地のことを指している。つまり、杏の花が咲いたらもう春なので、そろそろ農作業を始めなさい、と農民に教えているのだ。杏が報春花といわれる所以であろう。

中村達雄（なかもら たつお）◆ラジオベキ、オリンピック、博報堂などに勤務し、中国に16年間駐在する。現在、横浜市立大学大学院に在籍



▲三連楼
慕田峪長城の登り口にある。中心楼を空心、二つの側楼を実心とする三樓連結構造を特徴とする。万里の長城の関口としては唯一の珍しい建築構造だ。

◀長城に咲く杏花
巨龍が蛇行する周辺に春雪が降り積もったように見えて美しい。まったく修復されていない原始の長城は、北京地区では珍しい。

